

# 石塔のあり方から社会の一側面を探る

## —市原市を対象として—

小 高 春 雄

### 1. はじめに

テレビの時代劇には時代考証の担当者がいて、バックの風景はもちろんのこと、細部にいたるまで気を使っているようである。しかし、仕事柄であろうか、茶屋で出される茶碗を始めとして、なるほどこまでは無理であったか(失礼!)、ということも少なくない。その端的な例に墓地の景観がある。

怪談でお馴染みの墓地を舞台とした撮影シーンはとりわけ近世江戸時代の時代劇によく登場するが、そこではきまって石の墓塔が林立する背景が選ばれる。しかし、墓塔が林立する墓地の景観は江戸時代でも寛文から元禄以降徐々に整えられ、普通の村では文化、文政の化政期を待たねばならない。これに墓塔の種類及び形態的变化が加わるので、正確に言えば最低50年単位くらいで景観変化を考えてくれるのが望ましい。

とはいえ、これも墓塔が教えてくれる情報のひとつにすぎない。一地域における石塔のあり方、様相から何がわかったか、また何が課題として残ったか、一つの試みとして理解していただければ幸いである。

### 2. 石塔とは

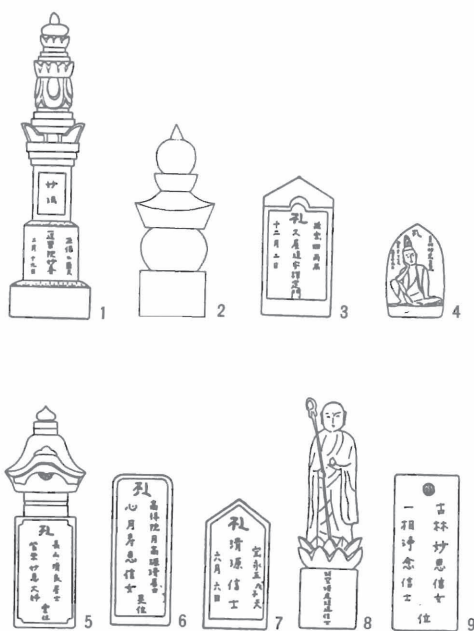
石塔とは、その名のごとく石で作られた塔であるが、この塔とは仏教的な意味での塔で、供養塔あるいは墓塔をさす。しかし、その定義はかならずしも一定しているわけではない。

形態的にみた石塔の種類は多く、それは第1図に示しておくが、その内の一部が今日に伝えられているわけである。さらに現在では洋型などといって板石に〇〇家之墓と刻んでいるものを筆頭に新たなタイプが加わりつつある。しかし、ここで忘れてならないのは単なる形態状の変化ではない。現在起こっているこのような変化は、近世における宗派の違いや階層差といった要因と違って、むしろ石塔そのものの性格差に起因するからである。



▲市原市海士有木の墓地景観

海士有木の某墓地は墓塔が林立する好例であるが、紀年銘を調べてみると17世紀以降今日まで、徐々に造立された結果であることがわかる。



第1図 石塔の種類—市内南部—

(2を除き谷川 1984から引用)

この性格の違いとは何か。それは以後において明らかになるだろう。

ところで、石塔の歴史という観点でみれば、本県の場合、中世の石塔のほとんどは板碑、五輪塔、宝篋印塔であり、後2者は近世とりわけ18世紀代まで盛んに造立されている。それゆえ、本稿では主にこの2者を扱うこととした。

市原市を対象としたのは、筆者の現住地である関係で最もよく調査しえたからにはほかならないが、天台・真言、曹洞、浄土、日蓮宗各派が混交、あるいは、地域別に集中するといった条件も考慮した結果である。

なお、板碑については既に谷島一馬氏また川戸彰氏が市内の板碑を集成しており、その後の発見例や未搭載はあるものの大勢に影響はないと考える(谷島 1986、川戸 1986)。

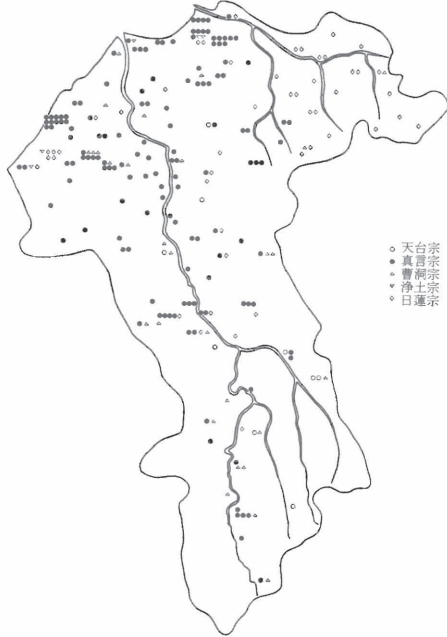
### 3. 市原市中世五輪塔、宝篋印塔

市原市内に現存する中世五輪塔、宝篋印塔については谷島一馬氏の調査結果をまとめた『市原の歴史と文化財』(市原市教育委員会 1983)、及び、川戸彰氏(川戸 1986)によってその概要が報告されているが、また、市原市文化財研究会員諸氏(『市原市文化財要覧』1969他)や、斉木勝氏(斉木 1980)、古河功氏(古河 1982)によってもその一部が報告されている。しかし川戸氏の3例と斉木氏の2例また古河氏の1例を除けば、すべて写真による紹介であるので、まず筆者実測による図を提示して、以下進めたい。なお、石塚の天正18年銘宝篋印塔については写真から復元したことをお断りしておく。

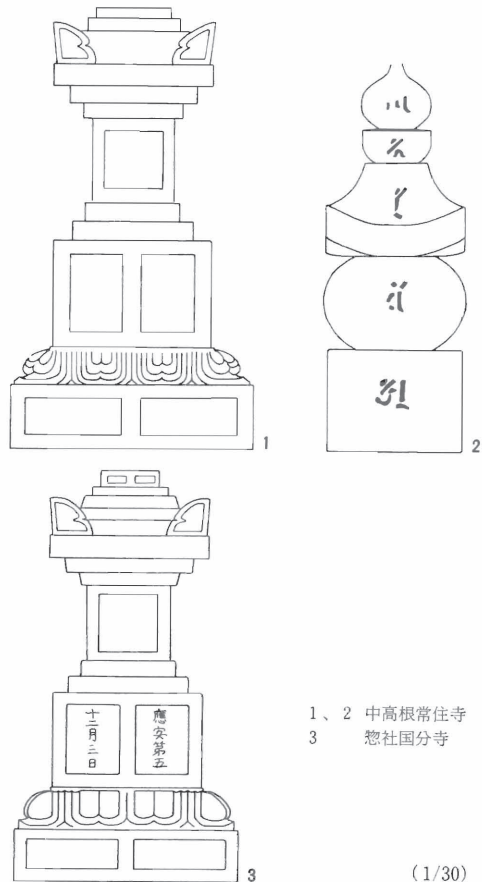
現在のところ、市内で最も古い塔は無銘ながら中高根の常住寺宝篋印塔であろう。この塔は従来南北朝時代と考えられてきたが、古河氏の指摘のように鎌倉時代末期の可能性が高いものであり、相輪上部を欠いているのが惜まれる。また銘文についてもしかりである。

これに次ぐ、あるいは同じ頃といってよいかもしれないが、同じく常住寺の五輪塔が挙げられる。梵字の彫りは深く、鎌倉時代の作風に特徴的な均整のとれた優美さをのこしているものである。

市内最古の紀年銘資料であるいわゆる将門塔(應安五年=1372)がこれらに次ぐものといえる。かつて菊間の親王塚古墳の墳頂にあったが、現在は



第2図 宗派別寺院分布(『市原市史 中巻』)



1、2 中高根常住寺  
3 惣社国分寺

(1/30)

第3図 中世石塔

惣社の国分寺に移され、傷みの激しい塔身部は復元されている。やはり相輪の欠けているのが惜しまれるが、南北朝時代の基準資料として注目される。

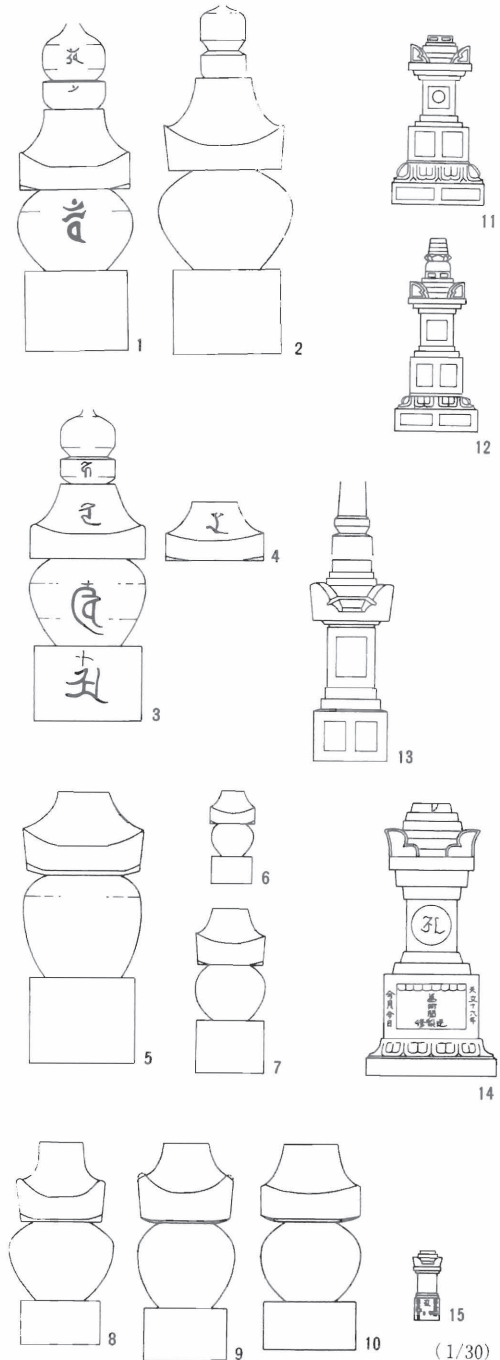
室町時代に入ると石塔の数も増加する。応永二年（1395）銘中野光徳寺の宝篋印塔基礎部（ただしこれは現在所在不明である）を最古の資料として、以下、五輪塔では御墓堂の伝小弓公坊夫妻の五輪塔、次いで、大坪福楽寺、次に郡本多聞寺、そして、八幡無量寺の順に推移するかと考えられる。

一方、宝篋印塔では椎津城跡出土の2基（ここでは便宜的に現組み合わせを図示する）、次いで能満出土の2基（能満城跡出土宝寿二年=1534銘基礎部、小字居心城出土の基礎～笠部、ただし前者は読み取るのがかなり困難であり、後者は参考程度の域を出ない）、今富円満寺の天文十六年（1547）銘塔、そして、市内最南石塚の天正十八年（1590）銘一石宝篋印塔の順となる。

もちろん、本県における戦国期の始まりを永享から康正年間の間を求めるならば、15世紀中頃以降は戦国時代の所産ということになる。どういうわけか、この15～16世紀前半の紀年銘資料は良好なつまり揃いの遺品に乏しい。時代的背景によるのだろうか。一方、下総地域で類例の多い戦国末期天正年間の中～大型塔が一基もみられない。これは多かれ少なかれ上総に共通する現象であるが、これも何らかの政治的動向と関連するのだろうか。

さて、今までは既に紹介されてきたあるいは既知の石塔を再度検討した結果にすぎない。従来の中世石塔研究は、紀年銘資料また中～大型の塔にほぼ限定されてきた感があり、無銘でなおかつ小型の塔はほとんど見過ごされてきたといつてよい。これはどの石塔であれ一つの歴史資料として捉え直した場合、極めて遺憾なことといわねばならない。筆者はこのような観点より、市内の各寺院を回りながら、小型の石塔についても意をほらいその把握に努めた。第5、6図はその結果の一例である。

結論からいうと、五輪塔であれ宝篋印塔であれ各部揃った完存品でも高さ1mに満たない小型の塔がいかに多いことか。寺院の境内にあるということは、その一角に立てられていたと思うかもし



1、2 八幡共同墓地 11、12 椎津城跡出土  
 3、4 大坪福楽寺 13 字居心城出土  
 5～7 郡本多聞寺 14 今富円満寺  
 8～10 八幡無量寺 15 旧石塚共同墓地

第4図 中世石塔

れないが、それらの多くはその近辺より出土したものを寺院に持ち込んだ結果であろう。では本来の造立場所はどこか。いくつかの調査事例が手掛かりとなる。

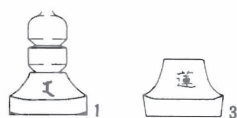
木更津市請西の中郷谷遺跡では、平成2年度の調査において台地下の緩斜面より五輪塔8基分が出土した。そのあり方から地形なりに帯状にテラスを造成して、そこに五輪塔が横列に立てられていたようである。おもしろいことに、その西側には火葬跡と思われる土坑が13基検出されている一方、五輪塔の下からは火葬骨も出土せず、土坑も検出できなかったという。

近年、君津郡市内では類似の調査例も多く、共通することはいずれも斜面部あるいは崖下に立地していることである。斜面部を調査の対象とするようになった結果によるところが大きい。市内では、城跡の調査に伴って小型の石塔が出土する例が多いが、これは城跡の一角やその外側に墓域が設けられた（城以前の遺構に伴う場合も考えられるが）ためであろう。恐らく、集落の背後の山の斜面あるいは山裾を削ってそこを墓地としたのではなかろうか。

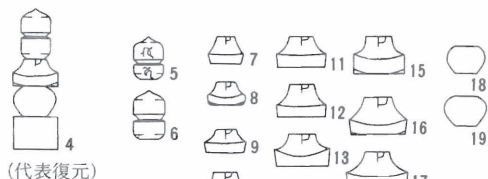
ではこのような小型の石塔はいつごろから造立されたのだろうか。既に挙げた椎津城跡出土また光徳寺の宝篋印塔の例から、室町時代初期より徐々に造立はされたものの、広範な広がりを見せるのはやはり15世紀後半～16世紀であろう。15世紀～16世紀の代表的な資料に妙照寺境内石塔群、同じく16世紀を代表する資料に村上城や白船城出土資料が挙げられる。

さて、最後にこれら石塔群の被葬者または造立者の階層及びその宗教的性格について簡単にふれておきたい。市内の石塔の内、銘文に被葬者、造立者が記されているものは、円満寺と石塚墓地の2例のみで、前者は僧侶の逆修塔（生前に死後の安楽を願って造立する）、後者は法印つまり和尚の供養塔である。残りのものについては、当然僧が考えられるが、大型のものは有力な武士、高位の僧と考えるのが自然であろうし、中小型のものにしても、一段低い武士、僧とみておきたい。中世郡郷のなかに自らの勢力を有するいわゆる土豪層も当然このなかに加わることになるだろう。

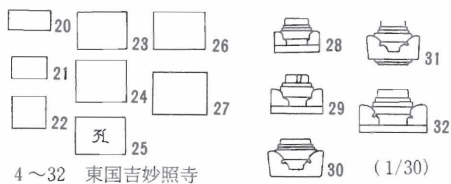
中世石塔の宗教的性格については、現代人の多くが既に理解できないものとなっているようであ



1、2 中高根称礼寺 3 姉崎妙教寺



(代表復元)



4～32 東国吉妙照寺

第5図 中・小型石塔



第6図 小型石塔の分布

る。既に挙げた逆修（ぎやくしゆ）にしてしかりであるが、これは死後に戒名をいただく現代の習いのなせる業でもあろう。仏教の教えそのものが風化してしまったのである。五輪塔各部や宝篋印塔塔身部には本来仏を示す種子が四面に梵字で深く刻まれる（四法門）。市内でも南北朝期までの石塔はその例が多い。人は仏の導きによって成仏するのであるから、それゆえ供養し、功德を積むことになる。導師となるべき僧はもちろん、殺生も時としてやむをえなかった武士階級はそれだからこそ親、夫の供養をした。それも自分のためでもあったのである。

供養塔か墓塔かということが問題にされることがある。無銘で、石塔の下から火葬骨が出土する場合をどうみるかということであろうが、中世の場合それは基本的に供養塔でよいだろう。これは、近世の「墓塔」の変遷と深く関連する。

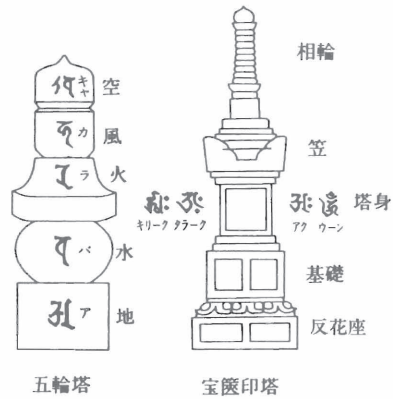
#### 4. 市原市の近世始めの五輪塔、宝篋印塔

天正18年（1590）を境として、関東では近世の始まりとする場合が多い。事実、石塔を考える場合でもこの点は好都合である。

家康の関東入国に伴い、房総には千石以上の武将で30人に及ぶ家臣団が配置された。かれらは慶長五年（1600）の関ヶ原の戦いの勝利に伴い、また西国へ移った者も多かったが、結果として千葉、原、上総武田氏などの在地勢力は一掃されることとなった。市原地域では五井の松平氏、潤井戸の永井氏等がこの徳川家臣団の代表的存在であるが、このことが、石塔にどう反映されたか、ということをもまず考えておく必要がある。

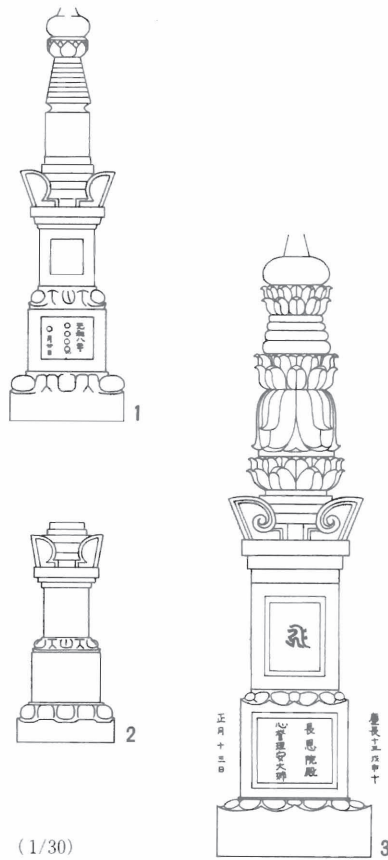
市内では五井守永寺の慶長十三年（1608）銘大型宝篋印塔がまず挙げられるところであるが、これは装飾に富んだ相輪部や笠部の様相（輪郭が二重で巴状をなす）から一見してわかるように、後世の所産である。大名クラスにおくられる「長恩院殿心普理安大姉」という法号の通り、この石塔は五井に入った松平家信の母の供養塔であり、守永寺の記録から既に延宝五年（1677）に造立されたと指摘されている。

その意味で、石川竜溪寺の林家墓所にある元和元年（1615）及び八年（1622）銘宝篋印塔は貴重である。後者を含めた4基についてはすでに斉木勝氏によって報告されており（斉木 1984）、詳し



第7図 石塔にみられる種子（仏）

※これは基本的なかたちであり、実際は多種多様である。  
また、流派により書体も異なり、異体字も多い。大坪福楽寺の五輪塔はその好例である。



(1/30)  
1 石川竜溪寺 3 五井守永寺  
2 権津妙経寺  
第8図 近世宝篋印塔—元和年間—

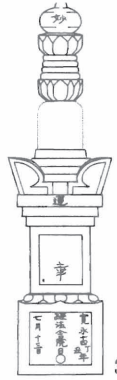


1

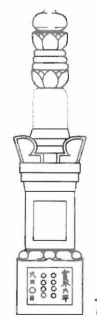
参考資料  
(久留里龍源寺)



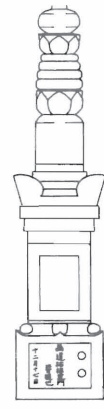
2



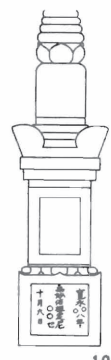
3



7

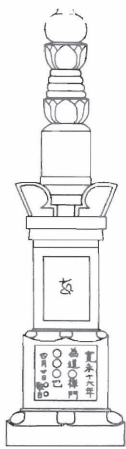


11

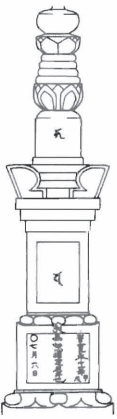


12

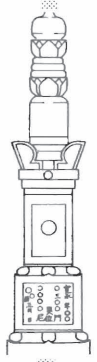
- 2、3、6 姉崎妙教寺
- 4 武士法泉寺
- 5 権現堂満蔵院
- 7 西国吉医光寺
- 8 月崎永昌寺
- 9 草刈行光寺
- 10 本郷共同墓地
- 11、12 高坂葉王寺
- 13 石川竜溪寺



4



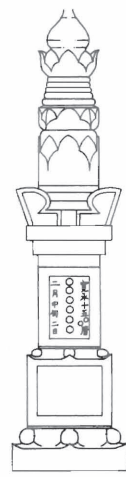
5



8



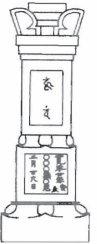
9



13



6



10

- 君津市久留里龍源寺の寛永元年銘逆修塔は好資料のため掲げた。
- 3の妙教寺寛永十四年銘塔は下の5（寛永十一年銘）と紀年銘からみれば逆転するが、塔形また同一寺院ということ considering して上位に掲げた。
- この他に好資料として、中野光徳寺の寛永十年銘宝篋印塔が挙げられる。

(1/30)

第9図 近世宝篋印塔—寛永年間—

くはそちらを参照されたいが、相輪の伏鉢が長大化していることなど、元和期の特徴をよく備えている。

林家の出自は信濃小笠原氏に遡り、代々徳川氏に仕えたという(『寛政重修諸家譜』)。彼が竜溪寺といかなる関係を有していたか明らかでないが、「茂原郷殿辺田村江籠居仕」また「在上総国殿辺田村」(『林氏系譜』)とあることから、地理的に近い竜溪寺の壇那として関わっていた可能性が高いと思われる。ちなみに、殿辺田とは石川竜溪寺の対岸にあたる現外部田のことである。

この石塔群は単に市内における元和期の確実な例というのみならず、被葬者が特定され、しかも造立に至る経緯が銘文や記録からたどることができる点でも注目に値する。

なおこの他に、姉崎妙教寺に元和八年銘五輪塔がある(市原市史 1986)というが、確認できなかった。妙教寺には戦国期の中型五輪塔(火輪)や無銘ながら元和～寛永期の様相を示す宝篋印塔もあり、寛永期の豊富な石塔群とあわせ注目される。

寛永期は石塔の変遷上一大変革期に当たる。市内では寛永五年銘の妙教寺宝篋印塔をはじめに、以後次々と町内各地で石塔とりわけ宝篋印塔の造立が盛んに行われるようになる。

この期の宝篋印塔の特徴は、上級武士や高位の僧にみられる装飾豊かなものは別として、反花座また基礎上端の反花は簡略化し、蓮弁は各コーナー及び中央にほぼ固定する。塔身部は次第に細長くなり、笠部は軒上4から5段、軒下2段にほぼ固定する。相輪部は伏鉢、請花、九輪、宝珠となるが、伏鉢の上に垂花は未だなく、九輪も初めは4段次第に3段となる。

種子はオーソドックスに塔身部に金剛界四仏を刻むものが多いが、日蓮宗系では題目(「南無妙法蓮華経」の七字)を上から各部にまたは塔身部に刻む。他に、まったく何も刻まないものや五輪塔の正面発心門のキャ、カ、ラ、バ、アを刻むものもあって様々である。

銘文は基礎の輪郭内、向かって右側から縦書きで没年、戒名、月日を入れるのみとなる。戒名は様々で、今日ではほぼ誰でも付けられている〇〇院△△□□居士(大姉)というようなものは、既に挙げた守永寺、松平家信の母の例ぐらいである。

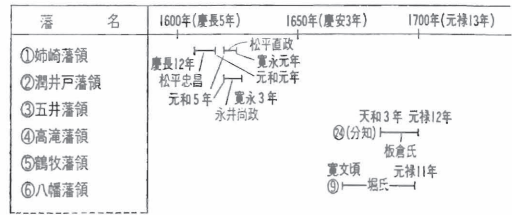
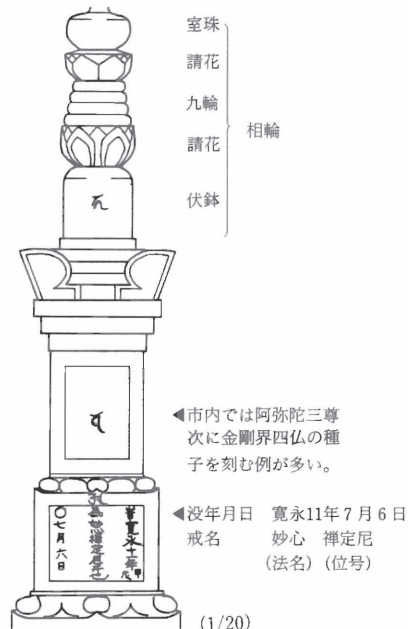


表1 17世紀代市内諸藩領(大名領)の変遷(『市原市史』中巻)

居士  
(正面) 玄明院光山旧露大  
(右側) 元和乙卯年  
(左側) 五月七日  
(裏面) 元和元乙卯年  
三州住林  
藤四良口  
意 於大坂打死也  
光山旧露居士  
五月七日敬白

⑩『寛政重修諸家譜』によれば吉忠は藤四郎ともいい養子として林家に入り元和元年、高木正次に属して大阪夏の陣で戦死した時は29歳であったという。

石川竜溪寺林氏七代吉忠墓碑銘(『市原の歴史と文化財』)



第10図 寛永期前半石塔凡例(満蔵院)

その多くは法名のみ、法名+位号、道号+法名+位号であり、下文字に霊位または霊とつく。

一方、五輪塔では、どういうわけか小型の一石五輪塔が主流となる。中～大型で寛永の紀年銘を有する良好な例は僅かに新生祐嚴寺の寛永二十二年銘五輪塔を挙げるにすぎない。僧の墓がほとんどであることと関係するものであろうか。

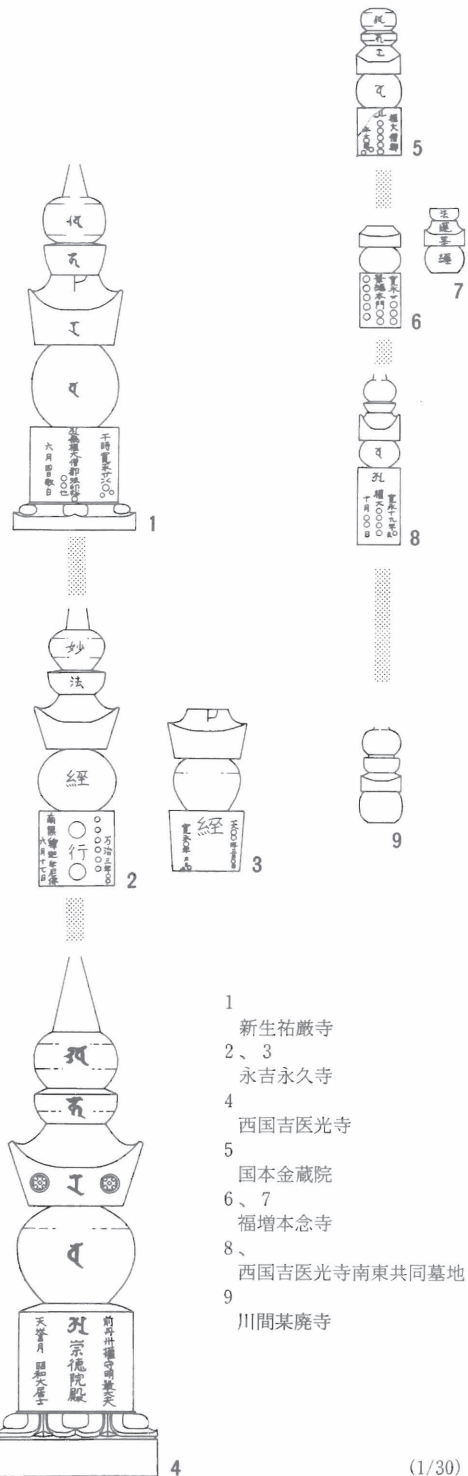
中世と同様、被葬者及び造立者について考えてみよう。林家石塔群で明らかのように、慶長～元和期の石塔については僧の他に、徳川家臣団の武士がまず考えられる。天正18年上総周准郡に移った旗本小笠原氏は、富津飯野に居住した関係から、一族の墓塔を多くのこしている。とりわけ、慶長から元和期の石塔は類例の少ない該期の様相を知る好資料である。〔『富津市史』史料集二〕。市内においても、松平氏や林氏の他にも当地に所領を得た武士は当然いたはずである。逆にいえば該期の石塔の存在が彼らの足跡をたどる手掛かりとなるかもしれない。

一方、寛永期に至り市内各地で造立された石塔については、僧を除いて直接の因果関係こそ見いだせなかったものの、その後の中型塔が名主を始めとした村役人層にほぼ限定される事実からして、やはり遡及して考えてみるのが自然であろう。

前に、墓塔か供養塔かを問題とした。銘文からみるかぎり、近世塔は題目・名号塔等信仰に関わるものや逆修塔を除き墓塔といってよい（その萌芽は既に中世末期にみられる）。ただし、近世でも造立層の裾野がひろがるにつれ、墓塔にも変化が生じている。しかし、これについては後で述べよう。

ところで、読者も疑問に思ったかもしれないが、室町・戦国期に沢山造立された小型の石塔がどういうわけか近世には姿を消してしまうのである。近世初頭の五輪塔の場合、その特徴的な空風輪から判断できるが、市内ではほとんどみかけないし、また、中世石塔群のなかでもしかりである。一般に本市のみならず、石塔の造立が一般化するのには寛文期（1661～）以降といわれている。中世と近世の小型石塔造立層を同列に扱えないが、この不連続をどうみたらよいだろうか。

五輪塔、宝篋印塔以外についてもふれておかなばならないだろう。それは、近世の墓塔の主なもの、つまり、板碑型、光背型がこの元和から寛永



- 1 新生祐嚴寺
- 2、3 永吉永久寺
- 4 西国吉医光寺
- 5 国本金藏院
- 6、7 福増本念寺
- 8、 西国吉医光寺南東共同墓地
- 9 川間某庵寺

第11図 近世五輪塔—寛永～延宝年間—

(1/30)





宝篋印塔（姉崎 寛永期）



板碑型（海士有木 寛文・延宝期）



五輪塔（佐是 正保期）



光背型（新生 延宝期）

写真2 寛永～寛文頃を代表する主な塔型

にかけて出現しており、近世墓塔群の原型が形成されたことである。

寛永以降、正保（1664～）から万治（～1659）までの間は石塔の造立数にそれほど大きな変化はない。しかし、宝篋印塔の相輪部は伏鉢が消え、下から請花、垂花、請花、数段の九輪、請花、宝珠という近世的スタイルが確定する。また、五輪塔は縦長の地輪、ほぼ球形の水輪、軒端のつり上がった火輪、円錐のつく空風輪というこれまた近世スタイルが完成する。

また、笠付型墓塔が現れるのもこの頃である。

寛文期以降はいわば第二の画期といってよい。近世前半の墓塔形はほぼ出揃い、墓塔のみならず民間信仰に伴う石造物も広範に出現して、村の景観に石造物が加わることとなる。また、これは神社の石造物についてもしかりである。

造立層は村の上層農民まで下りており、一部の富裕な農民は武士をも凌ぐ墓塔を立てるようになった（武士村名主嶋野家他）。また、墓塔は多く男女二人、あるいはそれ以上の戒名を刻む例が多いが、これは子供あるいは子孫が没後の適当な時期（年忌）に合わせて立てたものであろう。

子供の墓があらわれたのもこの頃である。地藏菩薩像を陽刻した光背型に童子・童女（大体4～14歳）、孩児・孩女（2、3歳）、嬰兒・嬰女（当年出生の男女）と刻んでいる。初秋に両親の願いもむなしく息をひきとった場合、それは秋露童子というわけである。

一方、女性は如意輪観音や聖観音像を同じく陽刻した光背型に戒名を刻む。

この寛文から元禄頃をもって近世石塔のあり方もほぼ固定した感がある。

以降の状況については、市内南部高滝・養老地域の墓塔悉皆調査の結果をまとめた谷川章雄氏の報告（谷川 1984）をまず紹介する必要がある。

その概要は第12図に示しており参照されたいが、市内北部の状況も私の限られた調査結果をもとにするかぎりそれほどの違いはない（北部のほうが17世紀前半代の遺例が多い）。宗派による違いが墓塔にどう反映されたかという課題はあるもののこのような作業が市内全域に及ぼされることが、まず出発点であろう。

その意味で、市原市文化財研究会による約30年に渡る活動、また、町田茂氏等による近年の石造

物悉皆調査は石造物のなかに占める石塔のあり方を考えるうえで、これまた、特記しておきたい。

## 5. 資料化にむけて

中世石塔、なかでも五輪塔、宝篋印塔、板碑については長い研究の蓄積がある。しかし、従来の研究がともすれば歴史的石造美術品としての観点、視点より調査・研究されてきたきらいはなしでない。

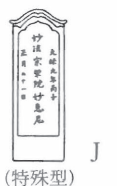
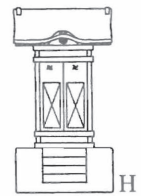
いうまでもなく、これら石塔は仏教的死生観及びそれに裏付けられた「葬制」の産物といってよい。つまりそこに信仰が生きており、その結果としての「遺物」であるならば、すべての石塔は等しく同一の基準で調査、記録されなければならない。筆者が無銘・小型の石塔に留意したのもまさしくその理由による。

その一方で近年、近世墓塔の報告例は着実に増えつつある。これは庚申塔を始めとした活発な石仏調査に触発されたところもあるが、一地域における悉皆調査例が増すにつれ、その地域性と共通性が漸く明らかにされようとしている。墓塔研究の歴史上、やはり画期的なことといってよいだろう。

とはいえ、それで資料化が達成されたと考えるのは早計である。石仏調査で明らかのように、写真、銘文、計測値から始まって、形態別の時期的変遷で事足りてしまうならば、石仏本来の意味が隠れてしまうのではないか。石仏にしてもしかりであるが、近世初期の塔形は俗に野仏といわれるような如来・菩薩形以外のものが多くみられる。講中（こうじゅう）による造立そのものに意味があったのである。

本市を特徴付ける信仰の一つにいわゆる三山信仰がある。その内容は既に対馬郁夫氏によって詳しく紹介されており（対馬 1968）、くりかえさないが、つい最近まで造立されていることもあって、その造立背景を詳細に窺うことができる。このような作業があって初めて石像が石塔として再生されよう。

なるほど信仰自体はまったく個人の産物であり、われわれはその心の世界にまで踏み込むことはできないが、信仰を生み出したあるいはそれが伝統として根付いていた社会そのものを考えることは可能であり、そこにこそ資料としての普遍性がある



| 年 代                 | 形 態 |   |   |    |     |    |    |    |   |   |   | 計 |   |   |     |
|---------------------|-----|---|---|----|-----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|-----|
|                     | A   |   |   | B  | C   | D  |    |    | E | F | G |   | H | I | J   |
|                     | 1   | 2 | 3 |    |     | 1  | 2  | 3  |   |   |   |   |   |   |     |
| 慶長6～慶長15(1601～1610) |     |   |   |    |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   |     |
| 慶長16～元和6(1611～1620) |     |   |   |    |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   |     |
| 元和7～寛永7(1621～1630)  | 1   |   |   |    |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 1   |
| 寛永8～17(1631～1640)   |     |   |   | 1  |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 1   |
| 寛永18～慶安3(1641～1650) |     |   |   |    |     |    |    |    | 3 |   |   |   |   |   | 3   |
| 慶安4～万治3(1651～1660)  |     |   |   |    |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   |     |
| 寛文1～10(1661～1670)   |     | 1 |   |    |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 1   |
| 寛文11～延宝8(1671～1680) | 2   | 1 |   | 1  | 1   |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 5   |
| 天和1～元禄3(1681～1690)  | 1   |   |   | 1  |     |    |    | 1  |   |   |   |   |   |   | 3   |
| 元禄4～13(1691～1700)   | 3   |   |   | 7  | 1   |    |    |    |   |   |   |   |   | 1 | 12  |
| 元禄14～宝永7(1701～1710) | 6   |   | 2 | 7  |     |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 15  |
| 正徳1～享保5(1711～1720)  | 6   |   |   | 8  | 2   |    |    |    |   | 1 |   |   |   |   | 17  |
| 享保6～15(1721～1730)   |     |   |   | 4  | 4   |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 8   |
| 享保16～元文5(1731～1740) | 1   |   |   | 5  | 10  | 1  |    |    |   |   |   |   |   |   | 17  |
| 寛保1～寛延3(1741～1750)  | 2   |   |   | 5  | 9   |    |    |    |   |   |   |   |   |   | 16  |
| 宝暦1～10(1751～1760)   |     |   |   | 4  | 15  |    |    | 2  |   |   |   |   |   |   | 21  |
| 宝暦11～明和7(1761～1770) |     |   |   | 2  | 10  | 1  | 1  |    |   |   |   |   |   |   | 14  |
| 明和8～安永9(1771～1780)  |     |   |   | 1  | 15  | 1  | 1  |    |   |   |   |   |   |   | 18  |
| 天明1～寛政2(1781～1790)  |     |   | 1 | 1  | 20  | 1  | 1  | 1  |   |   |   |   |   |   | 25  |
| 寛政3～12(1791～1800)   | 1   |   |   | 2  | 24  |    | 1  | 1  |   | 1 |   |   |   |   | 30  |
| 享和1～文化7(1801～1810)  |     |   |   | 3  | 16  | 1  | 1  | 3  | 1 |   | 1 |   |   |   | 26  |
| 文化8～文政3(1811～1820)  |     |   |   |    | 30  | 1  | 1  | 2  |   |   |   |   | 1 |   | 35  |
| 文政4～天保1(1821～1830)  |     |   |   | 2  | 11  | 5  | 2  | 2  |   |   |   |   |   |   | 22  |
| 天保2～11(1831～1840)   | 2   |   |   |    | 8   | 1  | 3  |    |   |   |   |   |   |   | 14  |
| 天保12～嘉永3(1841～1850) |     |   |   |    | 9   | 4  |    |    |   |   |   |   |   |   | 13  |
| 嘉永4～万延1(1851～1860)  | 1   |   |   |    | 6   | 1  | 1  | 2  |   |   | 1 |   |   |   | 12  |
| 文久1～明治3(1861～1870)  |     |   |   |    | 3   |    | 1  | 2  |   |   |   |   | 1 |   | 7   |
| 計                   | 26  | 2 | 3 | 54 | 194 | 17 | 10 | 14 | 6 | 3 | 1 | 3 | 2 | 1 | 336 |

第12図 高滝・養老地区の近世墓塔の変遷 (谷川 1984をもとに作成)

るとみる。資料化とは畢竟時代をこえて通用する基準にそった分析である。

## 6. まとめにかえて

中世から近世にわたる石塔の流れを、一地域を例にして、一貫した考えのもとにみてみようというのが本稿の目的であった。しかし、意識だけが先走りして、その基礎となるべきデータの不十分さを思い知らされる結果となった。

既に研究されているところであるが、市内は両墓制といって、埋墓と詣墓の二種類の墓が広範にみられる地域である。本来は個人の屋敷墓まで調査すべきであろうが、今回は寺院に付属する墓地、また、共同墓地の一部を巡回した結果である。

個々の石塔自体についても、一石のものとはともかく、五輪塔や宝篋印塔は造立後に積み直されているものが多い。またまって造立されている場合、本来の組み合わせを復元しかねる場合があり、新堀法光寺の寛永塔（最低数基）のように結局割愛せざるをえなかったものもある。

しかし、このような問題点は今後の課題として他日を期すつもりである。冒頭に問題提起したように、変化、変遷の要因が何であるのか、それは現代の墓塔—それは単なる墓石でありまた墓標である場合が多い—から遡って考えてみるのも必要であろう。

## 引用文献

- 1 谷島一馬 1986 「市原の板碑」『市原地方史研究』14号
- 2 川戸彰 1986 「石造物」『市原市史』中巻
- 3 市原市教育委員会 1983 『市原の歴史と文化財』
- 4 市原市教育委員会 1969 『市原市文化財要覧』
- 5 齊木勝 1980 「房総宝篋印塔考」『物質文化』35
- 6 古河功 1982 「市原市 常住寺宝篋印塔復元調査記」『庭研』第218号
- 7 君津郡市文化財センター 1991 『君津郡市文化財センター年報9』
- 8 齊木勝 1984 「近世の宝篋印塔—佐原市観福寺塔、市原市龍溪寺塔他—」『研究連絡誌』第7・8合併号

- 9 西脇康 1986 「幕藩領主の変遷とその構成」『市原市史』中巻
- 10 『寛政重修諸家譜』巻第二百十四
- 11 林勲 1988 「林氏系譜」『上総国請西藩主一文字大名林候家関係資料集』
- 12 小幡重康 1986 「社寺の果たした役割」『市原市史』中巻
- 13 富津市史編さん委員会編 1983 『富津市史』史料集二
- 14 谷川章雄 1984 「近世墓塔の形態分類と編年について—千葉県市原市高滝・養老地区の調査」早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊10集哲学・史学編
- 15 対馬郁夫 1986 「出羽三山信仰」『市原市史』中巻

## 参考文献

- 16 近藤敏 1989 「白船城跡遺跡」『昭和63年度市内遺跡群発掘調査報告』
- 17 田所真 1986 『千葉県市原市一村上城跡』(勲市原市文化財センター)
- 18 大島賢明 1966 「足利義明公」『市原地方史研究』第一号
- 19 落合忠一 1978 「戒名と墓石について」『上総市原』第二号
- 20 小幡重康 1986 「市原市の寺院考」『市原地方史研究』第14号
- 21 長谷川匡俊 1988 「江戸後期における房総寺院の分布と本末組織」『近世の村と町』
- 22 齊木勝 1983 「房総五輪塔小考」『研究連絡誌』第3号
- 23 須田茂 1985 『房総諸藩録』
- 24 千葉県教育委員会 1985 『千葉県石造文化財調査報告』
- 25 矢島俯仰 1992 『墓相大観』
- 26 千葉県 1974、1978 『千葉県史料 金石文篇』一、二
- 27 鈴木仲秋 1994 「新堀村の遡源的考察」『東国地域文化史序説』
- 28 町田茂他 1994 『市原の庚申塔』
- 29 町田茂 1992 「市原の狛犬」『上総市原』八号